論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（ 教育学 ）	氏名	古　賀　　洋　一
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

条件的知識に着目した説明的文章の読解方略指導に関する研究

論文審査担当者

主　　査	教　授	間瀬　茂夫
審査委員	教　授	山元　隆春
審査委員	教　授	難波　博孝
審査委員	教　授	中條　和光

〔論文審査の要旨〕

本論文は，国語科における読むことの学力を学習者にとって自覚的な読解方略としてとらえ，特に説明的文章の読みの学習指導について，方略を構成する知識（宣言的知識・手続き的知識・条件的知識）のうち条件的知識の獲得に注目した学習指導モデルを構築し，小学校高学年および中学校段階での授業観察や実験的授業を通して，その有効性を検証するとともに，読解方略指導のためのカリキュラムモデルへと展開したものである。

本論文は，序章から終章まで，全８章から構成されている。序章では，研究の目的と方法について述べ，以下の各章の研究内容と対応する研究課題が示されていた。

第１章では，本研究における読解方略の概念規定を行ったうえで，1980 年代以降の説明的文章の読みの学習指導論の検討から条件的知識に注目した読解方略指導の位置づけが明らかにされた。また，実践史の側面については，2000 年以降の説明的文章の読み方を学習指導の対象とした 514 例に及ぶ授業実践例の収集，分析から，論理追究型授業が増加する一方，方略の選択性・統合性の指導に課題が見出されることが明らかにされた。条件的知識の学習過程および指導のあり方の解明が説明的文章の読みの学習指導研究における重要な課題であることが明確にされた。

第２章では，論理理解の読解方略における条件的知識が，説明的文章教材の文章構造との対応において具体的にどのような知識としてとらえられるのかが明らかにされ，方略的読みの系統性について検討がなされていた。これまでの学習指導論の中で提案されてきた読み方について，方略という観点からとらえ直すとともに，中学校教材の分析を通して，物語的な説得性やイデオロギー性を解釈する読解方略を導出するなど，これまで枠組みとして提案されがちであった理解方略指導論を現状の教材やカリキュラムに沿ったものとして具体化しつつ系統化を行っていた。

第３章では，自己調整学習理論を読解方略における条件的知識の学習過程をとらえる枠組みとして援用することで〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル〉が構築された。これは，特に社会的認知理論に基づく自己調整学習に注目し，「計画」「遂行／意志的制御」「内省」の三段階のうち「内省」における「適応」局面での条件的知識の学習過程を強調したものであり，このことで読解領域固有の学習モデルを提示することができた。

第４章では，小学校高学年と中学校における論理の理解を意識的に行わせる説明的文章の読みの授業を観察し，そこで得られたデータの分析を通して，読解方略の条件的知識の学習過程が解明されていた。小学校高学年の授業観察では，この学年段階で学習可能な条件的知識の水準を特定するとともに，マクロなカリキュラムへの示唆を得た。中学校の授業観察では，既有の方略では解決できない「読みの困難」が解消される局面で条件的知識の学習が成立するなど，自己調整学習の過程に一致する過程が見てとれた。自己調整学習を基盤とした読解方略の学習モデルの授業実践場面への適用可能性が実証されていた。

第５章では，前章をふまえて再構成した〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル〉に沿って条件的知識の学習を促進する指導法が構想され，二つの実験授業を通して段階的な検証が行われていた。実験授業Ⅰでは，中学校１年生を対象とし，「類似文脈」と「複数文脈」からなる二種類の学習文脈配列の有効性が検証された。また，実験授業Ⅱでは，２年生を対象とし，より高次の階層的な論証構造を持つ教材を主教材とした実験授業が実施され，学習した条件的知識が他の文章（副教材）を読む際にも機能するなど，読解方略の転移性も認められ，学習指導モデルの有効性が実証された。

第６章では，これまでの成果を踏まえ，条件的知識に着目した読解方略指導のカリキュラムモデルが構築されていた。横軸に，読解方略の類型・教材の構造・指導内容となる条件的知識・指導方法の原理を位置づけ，縦軸に，指導間の段階性を位置づけるものであったが，こうしたカリキュラムモデルは，どの教材でどの読解方略を「選択」「統合」させればよいのかという実践的な課題に対する考え方や指針を教師に与える機能を持つものとして構想されていて，条件的知識の指導の具体化を可能にするものと判断された。

終章では，以上のような本論文の成果を研究課題に沿って総括するとともに，今後の読解方略研究に関して明確な展望を述べていた。

本論文の意義は、次の４点に見出される。

（１）説明的文章の読解方略指導の課題について，読み方の学習指導論および授業実践史の検討をすることで，方略の選択性，統合性という条件的知識に関わる点に見出した点。

（２）説明的文章の読解方略の条件的知識について，読みの目的や教材の文章構造に沿って分類し類型化するとともに，それらの系統性を記述した点。

（３）小学校・中学校段階の読むことの授業という実践的な場面における読解方略の学習過程に関して，自己調整学習理論を援用しながら独自に構築した学習指導モデルを用いて，客観的に記述するとともに，そうした記述の方法を確立した点。

（４）小学校高学年段階から中学校段階にかけての説明的文章の読解方略指導について，学習指導理論に基づいた指導方法を構築し，その有効性について実験的授業を通して検証するとともに，読むことの目的や教材と，指導する読解方略との関係や系統性を整理した，授業実践の指針となるカリキュラムモデルへと展開させた点。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成２８年２月１２日